

大本青年部研修資料

朗詠歌集

八雲神歌

八雲立つ出雲八重垣妻ごみに

八重垣つくるその八重垣を



朗詠歌集 目次

八雲神歌

大本歌祭り神歌

開祖さまのお歌

聖師さまのお歌

二代さまのお歌

三代さまのお歌

尊師さまのお歌

四代さまのお歌

教主さまのお歌

1

2

3

4

10

12

22

30

36

大本歌まつり神歌

昔より中絶したる歌まつり起こして御代を照てらさむと思ふ

敷島の大和みうたを詠みよみて神素盞鳴の神いぶかな

国々の八重の垣根を打ち払ひ神代を開かす瑞の大神

日の本の昔の御代の国風くにぶりに今立直す歌祭かな

開祖さまのお歌

ともしびの消ゆる世の中今なるぞさしそえいたす種ぞ恋しき

日暮ひぐらしの鳴く声きけば月の夜よに成なるは淋さびしき日の出を待つぞよ

本もとの種吟味いたすは大本で種がよければ末代の種

月の夜に嵐の音のさびしきよ千鳥鳴く声日の出を待つぞよ

朝雨の心勇まし春の花この行く先は広き世になる

聖師さまのお歌

いとけなき頃は雲間に天守閣白壁映えしをなつかしみけり

旧城趾<sup>きゆうじょうし</sup>落ちたる瓦の片<sup>きれ</sup>あつめ城のかたちをつくりて遊びぬ

寝ながらに月を仰ぎしあばら家の昔の住居わが眼に新らし

ふるさとの山野は秋の錦きて吾を照らせど父母は世になし

足<sup>たち</sup>乳<sup>ね</sup>根の母も吾身も応拳も生まれし清<sup>すが</sup>処<sup>ど</sup>と思へばなつかし

ほのぼのと訳は知らねど大いなる望<sup>のぞ</sup>みに生きしわかき日のわれ

百<sup>も</sup>八<sup>も</sup>十<sup>そ</sup>国<sup>くに</sup>くまなく大<sup>お</sup>道<sup>ほ</sup>を照らさむと若き日吾は故郷を離<sup>さ</sup>りぬ

慈眼もて世をなげきましし御開祖の御面みおもて今も吾が目に輝ふ

背を出せば教御祖おしえみおやは子のごとく喜びてわれに負はれ給へり

鶴山に妻は錦の機はたを織り吾亀岡よろずよに萬代を教ふ

よしや身は蒙古のあら野に朽つるとも日本男やまとおの子この品は落さじ

芦別あしわけの山はかなしも勇ましも神代ながらの装ひにして（北海道）

北海の旅路はろけし吾は今出羽の大野おおぬの雨ききてをり（東北）

鳥が啼く吾妻あづまの国に御代をおもふ宿の枕に雨の音さびし（東京）

日野川の水源みなもととほしも大山だいせんの尾根に湧き立つ雲につづけり（鳥取）

出雲路の旅にし立てば時じくも吾が眼引かるる雪の大山（島根）

八雲立ついずもの宮の清庭すがにわにもゆるがごとくつつじ花咲く（島根）



言靈の誠を筑紫のしまが根に生かし照さむ惟神吾は（九州）

雨はれの今日の真昼まひるのあたたかさ旅のやどりに妻としるるも

待ちわびし月は山の端は昇りけり三千年みちとせながき夜を照らして

春風の薫りかをて諸の花開く長閑のどかな御代となさしめ玉たまへ

鶴山に機はたや織るらむ吾妹わぎもこ子は青葉の風を窓に入れつつ

万代よろずよの常世とこよの暗もあけはなれみろく三会さんえの暁きよし

この神書もしなかりせば地の上に弥勒みろくの神世は開けざらまし

生きいきて生きのかぎりを天地の道にいそしめ神の御子たち

## 二代さまのお歌

きをつよくひろく大きくこまやかにあたたかみのある人になりたき

人はみな土よりいでて土に生き土の恩うけ土にかくるる

戦争に入れる力を平和なる道につくせばこの世天国

めいぢなる二十五年のはつ春に神のうぶ声いまもわすれじ

国々にきたる大難小難にのがせ給へと祈るご開祖

日の御恩月のお恵み土の恩はなれて人の住むところなし

かむながらみたま磨くといふことは土地つちのころになるをいふなり

ひのもとにくににうまれし神の子よよき種をまけ野にも山にも

三代さまのお歌

地の上になげきは影もあらずなと力なき吾はただ祈るなり

示されし道はひろらに明らけしなに今更に迷ふ人らぞ

雨嵐吹きすさぶとも吾は行かむ一つともしび高くかかけて

吾がいのち天<sup>かみ</sup>知り給ふ残されし道ひとすじにふみゆかむのみ

貧富の差ちぢまりて地の上にあらずひのなき世ときけばひたに恋しき

世の人の幸を吾のこひ願ひ西王母を舞ふ還暦の日に

ほがらかにあかるき鳥の声きけばみろくの春のおもはるるかな

巖として微動だになかりき祖母の一生の信念われにあらしめ

極貧にやすんじたりし祖母の一生おもへば惑ふ事なし

神仙の世界に君はるましつつ吾がゆく道を照したまへる

天にます母にまみえむ日のためにうつし世のわぎはげみて生きむ

旅の用意しつつし思ふ楽しみて行きたることの無かりし母を

己<sup>おの</sup>が道を一すぢに極<sup>きわ</sup>めまどひなき人等のなかに今日吾はをり

よき友を得しよろこびにきほひつつ今日の一日茶を学びるる

家に待つものひとりなくさすらひに似し思ひして湯の宿にをり

吾にのみ人等の多く求めくるうつたふる人のあらざる吾に

吾が心知ることなくて終へまさむそれにてよしと或る時おもふ

とがりゐし心の今日は安らぎて芽吹きはじめし山にむか対へり

怠りて吾がゐる日々にわが庭の馬あし酔し木は白き蕾びもちたり



雪雲が東の方に流れ行く夕べひと時心恋しもこひ

潮騒しほさいを恋ひて来にけるこの海に音のひそけく波の寄りゐる

人の前に堪へるし涙はばからず君を嘆きぬひとりの部屋に

石荒き坂路となれば先をゆく友は待ちゐてわが手を取りぬ

あと幾日保つならむか今日も来て紅葉の照れる道に立ちたり

降る雪は早くなりつつ石荒き谷の流れに音立てて落つ

萩の枝折れしもありて野のわき分すぎし庭にくれなるの花こぼれるる

かかる世の来るを憂ひて叫びたる吾らの友は囚はれにけり

いささかも所信をのべてひるまざる母の清しさは吾をなかしむ

黒雲くろくもにたちおほはれてかかるともわが行く道を迷はじと思ふ

とらはれのみとなりませどあめつちにはじめぬは君がまことなりけり

むねはしらとりちらされてよこたはるみや木をみては我はなみだす

去年こぞの秋とりこはされし宮跡のひはだの中に梅の花さく

朝の散歩につみて帰りし草の名を野びるの花とききてしたしき

夜毎よごと虫なきて秋もとのへり長き旅より夫かへりこし

玉とこそわがいつくしめる夫の名をこの警官ら呼びすてにいふつま

夜ふけて雨ふりいでぬ留置場に夫もめさめて聴きゐるならむ

井戸端の水をのみつつ母に夫にのませてやりたく涙こぼしつ

たはやすく泣けぬわれかも帰り来て一人となれば涙にじみ来

君なくて一日をだにも生きがたきおのれの心いまぞしりたり

菽に置く白露のごと吾が祖母の声は透きとほりふるひを帯びるき

吾が祖母の予言たがはぬ世の相を思へばさま五六七みろくの世は近からむ

道のべに桜うつくしく散りしけり吾が母上は死にたまひけり

この道を継ぐべく生れ来し吾に神の守りのなかるべしやは

教団に不平もつ人去りたまへ清きが残り道を護らむ

霧に似し雨降る中に雲珠桜珠うづぎくらたまの如くに咲きみちにけり

円まるく明るき月つきに對むかひて星一つ輝く暁を礼拝に出づ

猩々のよそほひ成りて立つ鏡の間わが初舞台の幕上らむとする

茨の路ひらきし友ら皆天にあり吾一人けふのよき日にあへる

吹きつくる風のはげしきわがつまをあわれみたまへおからすの神

尊師さまのお歌

人心まず清らかにならざれば何すれぞ世が平和になろう

他人<sup>ひと</sup>にゆるく吾<sup>われ</sup>にきびしくあるなればこの世の中は平和なるべし

助けもし助けられもしお互に仲良く栄えてゆくぞ楽しき

いと弱く小さき吾と知ることが道を求むるはじめなりけり

省みることのすくなき人にこそ悪魔は宿るものによりけれ

得<sup>え</sup>堪<sup>た</sup>へじと思ひしこともいくたびぞされども遂にわが堪へて来し

千万の黄金にまして魂の一つを得るぞ嬉しかりける

よきことを思ふだけでもよき種をこころの国に蒔きてるるなり

何をかもわれは願はむひたすらにもとつみたまと清めたまはれ



いきどほり呪ひ恨みのかずかずを覚えてのちぞ悟らえにけり

得も言はず苦しき時はひたすらにみづのみたまとわれはとなへつ

休むのは働くためぞなべて世の否定はよりよき肯定のため

物ごとに差別<sup>けじめ</sup>あればこそ天地<sup>あめつち</sup>はいやとこしへに保たれてゆく

われとわがくせ直さむとひたぶるにとこ省みる人ぞゆかしき

事にあたりて省みざれば悟りなし悟りなければ魂たまは進まず

よみがへるたび毎みたま清まりていやつぎつぎに神に近づく

昔あり今あり後のちもある身ぞと知ればうれしきとはの天地あめつち

他人ひとのこといふ暇があれば吾とわれを胸に手をあて考へてみよ

それぞれに真似のできない長所ありいかなる人も侮るなゆめ

目をあけて見れば天地てんちはかぎりなしより良き方へひた進むべし

吾とわが主義イズムのひとやに囚はれてせまく小さく暮らすあはれさ

吾なりしならば如何にと他人ひとのこと思ひやるこそ神心なれ

えらいとも偉くないとも思はずに力のかぎり尽くせもろ人

いづこより漂ひ来る嬉しさぞ月照る夜半よわの梅の香かのごと

かぎりなき天津みそのを開くべしさがのまにまに伸びよ人草

一二三四五六七八九十と弥栄へゆく大本の道

ある如くあらしめ給へなる如くならしめ給へと今日も祈りつ

言はざれど径こみちをなして集ふてふ桃の花こそげに慕はしき

惟神たまちはへませ大本の不動の信にわれふるひたつ

一点の曇りなきまで磨きなばみなそれぞれに光る玉なり

すめ神と心のかぎり念じつつなすことごとは実を結ぶなり

おのが身をいたはる如く他人ひとの身をいたはる心に神やどるなり

人知れず尽すまことはそのうちに天知る地知る人が知るなり

腹立てな短気は損気と昔からちゃんど相場がきまりおるなり

善よき友と交はる時はおのづからわが魂たましひもみがけゆくなり

吾とわが心みつめてよしあしをよく考へよ事をなすとき

世の中に嬉なしきものは情ななり理に落ちすぎてはさびしかりけり

ひたすらに祈りに祈りひたすらに歩あゆみに歩まばいつかいたらむ

はるかぜの吹きのはげしき宇津うつそみを見そなわすらむおからすの神

四代さまのお歌

水晶の種と生あれ給ふ三代の教主きみの御跡をかしこみ継がなむ

祈りつつ只ただいのりつつ吾が行かむゆくてに雨風吹き荒すさぶとも

代々だいたいの教御祖おしえみおやの御跡おんあとを踏みて行かなむ今日けふよりの吾

安らぎて気高き母の終つひの顔その父ちちはは母の顔に劣らず

通夜の客に会釈かへしつ吾が足らふこの美しき母のかんばせ

今宵ばかりは数多あまたきませよ通夜の客気高き母のかんばせ見ませ

何思ひ父の靈前みまへに坐るらむ気触れし者よと嘲笑わらひし人が

うからとの歡少ゑらぎすくなき父上の一生ひとよを想ふ写し絵ゑみつつ

終つひの日も好みし風呂に入りて逝ゆきし父を思へば心和める



亡き父の体に合せし風呂桶かややに短き湯舟に吾が入る

父上もかく入り給ひしかと思ひつつ父の湯舟に足をかがむる

父上の部屋を開くれば煎じ薬の匂ひこもれり在りし日のごと

ミロクの世願ひし聖師きみのよそほひか能西王母せいおうぼの古き写絵うつしゑ

信徒まめひとの念おもひの凝りこし長生殿けいぶ今日けふはれやかに舞台ぶたいひらかる

ミロクの世の型てふ能西王母かしこみ舞はなむ今日の佳よき日に

エスペラント記念祭典始まりていつしか空晴る聖き師み嘉よせるか

さまざまの祈りの姿言葉なれど平和を願ふ心は一つ

冷夏なる去年こぞは陽ひを恋ひ干天かんでんの今年こぞは水の恵みを願ふも

異常気象となりて久しも天地あめつちのみ恵みを忘れし人らのおごりに

信徒まめひとの心こもれる歌垣うたがきにさはなる曲うたをはらはせ給へ

降る雨にぬれそぼちつつ御開祖ごかいその御辛苦ごしんくしのぶ沓島めしまの山に

これ以上曲まが事増ことますな残る月日つきひ聖師きみに祈らむ十二夜の月

夜半よはさめて静かなる雨聞きをればいつしか心穩おだひになれる

言いひたき事少ことすこし控ひかゆること覚おぼゆ教主けうしゆうにん就任ななとせも七年となり

冷<sup>つめ</sup>たき風<sup>かぜ</sup>浴<sup>あ</sup>びし思<sup>おも</sup>ひすテレビニユースむごきあやめは少年<sup>せうねん</sup>と知<sup>し</sup>り

み祭りに吾が仕へるる拜殿へ梅雨明けの今日風通りゆく

宗教はアヘンと言はれてせんもなし異宗者どうしの争<sup>ま</sup>ひ絶えず

脳死臓器移植法の改悪を近く控へてまだ抗<sup>あらが</sup>ふかとふ機関長らあり

国歌国旗脳死を人の死と決むる今の日<sup>ひ</sup>の本<sup>もと</sup>いと情<sup>なさけ</sup>けなや

## 教主さまのお歌

この地球ほしのこの世紀よにめぐり生まれきて神業つかふる幸思しひをり

信徒まめひとと心ひとつに進みたし五六七の御代の道険しくも

日本魂の御種となりて践ふみ行ゆかむうそ多き世界よの誠尊し

聖師き様の言こと霊世界たませかいへ響あく愛善あいぜん歌声かたからかにいさみ進ままむ

愛善の農に仕ふる人々はみづほの国の宝なりけり

末代まつだいに例ためしもあらぬ岩戸開き聖師きみ様に捧げむつたなき日々を

稲そよぐ神饌田あぜの畦あぜに立ち緑とも乏ともしき国々を思ふ

聖師きみ様が夢八十年やそとせめぐり吾は今大モンゴルの草原に立つ

草香るモンゴルの平原のに朋ともら集ひ薄茶捧ぐる馬上の聖師きみ様に

滔々たうたうと計らひこえてみ経綸しぐみの進み展ひらくを目の当たり見る

浪高き竜宮海に玉水たますいを注ぎつつ祈りぬ開祖みおや様偲やびて

わが願ひエスペラントの歌まつり人は類ら同か胞らこぞりてエルサレムの野に

(エスペラント訳)

Ho, aspiras mi al la utaa festo ja en Esperant'!

fratar' de l' tuta mondo jen sur kamp' de Jerusalem'!

みぞれうつ嵐の鳥海山に登りつつ夫神恋ましし坤金神を偲びぬ

敵味方の遺児らと輪をなし踊らなむ万民和樂の世界の型をなさむと



